

木村九蔵の革新

1845年に高山村で生まれた高山巳之助（1845～1898年）は、高山長五郎（1830～1886年）の末弟であった。兄と同じく、彼は明治時代（1868～1912年）における日本の絹産業の成長の鍵を握る人物となる。1867年、彼は木村志満子（生没不明）と結婚、木村九蔵に改名した。義父である木村勝五郎（生没不明）は、九蔵に、一家を再興するよう役割を課した。

兄弟は、蚕を生育する新しい方式を開発するべく、一緒に働いた。長五郎と同じく、九蔵はこの挑戦に深く没頭した。1861年の悲劇は、日本の養蚕産業に衝撃を与えた。国内の蚕の大部分が真菌性の病気により消滅したのである。それでも兄弟は諦めなかった。彼らは気を取り直し、ビジネスはゆっくりと成長し続けた。

長五郎が自身の清温育法を発表したとき、九蔵はこれに極似した一派温暖育法を発表した。1877年、九蔵は賛同する仲間を集めて組織を結成し、のちに養蚕改良競進社（概して、蚕の生産を改良し競争する会社を意味する）となった。彼の計画は、自身の蚕の飼養法を広め、大日本帝国領各地の人々に新種の蚕を紹介することであった。彼は現在の埼玉県本庄に、本社と伝習所を設立した。

九蔵は養蚕について学ぶため、1899年、ヨーロッパを訪問し、ここで学んだことを本庄において蚕の貯蔵を改善するために利用した。九蔵は日本の絹産業の革命に一役買い、これを近代化させた。しかし、彼は成功を達成する裏側で、相当な試練を乗り越えてきた。九蔵が若い頃、懐疑的な人は、九蔵が魔術を用いていると非難した。伝えによると、彼は猟銃で狙い撃ちされたことがあるという。この銃撃が失敗に終わったことは、群馬、そして日本にとっては幸いであった。